

シナリオの旅

洋画シナリオ紀行

安井廣之

「市民ケーン」、そして「第三の男」

三十年も前のことになるが、私はフランスの製菓企業の東京支社で働いていた。幹部はフランス人なので、社内ではフランス語で話し、公用文書は英語で書いていた。その後、スイスの会社に移ったが、ここでの公用語は英語で、幹部会議は英語でおこなわれ、連絡文書も英語だった。したがって、日本にいながら、外国語の生活だった。

既にフランス語と英語の通訳案内業試験（運輸省のガイド試験）に合格し、外国語についてはプロの資格を持っていたが、ビジネスの世界は、その程度の学力ではまだ足りない。だから、当然のことながら日々勉強を続けていた。洋書を読み、ウォークマンで英語とフランス語を聴いていた。

外国語を身につけるには、外国映画を観るのも一つの方法だ。だが、ネイティブが早口でまくしたてるセリフを聞き分けるのは至難のわざだ。訛りもあり、方言が混じり、俗語だらけだ。

そんなとき、たまたまオーソン・ウェルズの「市民ケーン」

を観た。死の床でケーンがつぶやく「Rose bud（薔薇のつばみ）」の謎。回想とともに、24ミリくらいの広角レンズで撮った映像が連なり、はすかいの画面から被写体が飛び出してくる。パンチを食らっているようだった。目を離すことができないほど面白いストーリーで、また、きれいなアメリカ英語が話されていた。字幕スローはよくできていて、それだけでスジは追えたのだが、長いセリフを僅か一行の日本語に封じ込めてしまえるわけがなく、なんとか言っていることを全て分かるようになりたくて、聞こえてくる音と口の動きに全神経を集中し、私は観ていた。VHSビデオはまだ高価だったので、貸しビデオ屋で借りてきたのをダビングし、自宅で何度も観た。画面の下をボール紙で覆って字幕を見えなくし、言葉を聞き逃してはなるまいと、ついにはイヤフォンで聴きながら観た。それでも聴き取れないところがあるので、音声のカセットに録音し、ウォークマンで、歩きながら、電車の中で、あるいはホテルのロビーで、ひたすら聴いた。

当時、日本橋丸善の洋書売り場は、私にとって遊園地みたいなものだった。二週間に一回くらいは行っていたので、新しい本がはいるとすぐ分かった。映画関係のコーナーがあり、主として評論が並んでいた。ある日、そこにそれまでなかった「The Citizen Kane Book」という大判の本があるのを見つけた。この中に「市民ケーン」のシナリオが収録されていた。高価だったが、ためらうことなく、私は買った。そして、

ザナドゥーから始まる物語を、胸躍らせながら貪り読んだ。

これが私のシナリオ読みの始まりである。

オーソン・ウェルズの並外れた才能に目をとめたかたなら、「第三の男」もご存知だろう。アントン・カラスの奏でるツィターの調べと、オーソン・ウェルズの人を食ったような、あの斜め顔のスチル写真はつとに知られている。

あるとき、前述の映画関係のコーナーに、ロンドンのFaber and Faber 社刊行の映画シナリオが二、三冊並んだ。その中に、「The Third Man」があった。名前を知っているだけで、まだ観たことのない映画であったが、私は衝動的にこのシナリオを買った。いかにもこわもてのする、黒づくめの装丁の本だった。

ところが映画が手にはいらぬ。ビデオ店に行っても、古い白黒のVHSなど売れないから置いていないのだ。それで私は貸しビデオ屋を一軒一軒訪ね回り、とうとう新橋駅の近くの店に一本あるのを見つけた。店主に譲ってくれるよう掛け合ったところ、足元を見られ、五千円余りの値を付けられた。言い値で、私はそれを買った。

映画は面白かった。これも音声のカセットに入れ、ウォークマンで聴きに聴いた。シナリオを丹念に読み込み、セリフを筆写してそらんじた。ついには、ハリー・ライムやマーティンズのしゃべりが口をついて出るまでになった。

カール・モールドデン、ヴィヴィアン・リー、マーロン・ブランド

VHSビデオの時代は随分長く続いたが、そのうちにパイオニア社がレーザーディスクを発売した。これはLPレコードと同じ直径の、銀色をした録画媒体で、そのデジタル画質はVHSをはるかに上回るものだった。音質も良かった。秋葉原の電気街のビデオ売り場は、一斉にレーザーディスクを置くようになった。

その中で、ヤマギワの本店はアメリカ直輸入のレーザーのコーナーを設けていた。値段は日本製の半分くらいだった。もちろん日本語の字幕は付いていない。それを私は何十枚も買った。

その中に、「Fatal Vision」という二枚組、一九八四年製作のアメリカ映画があった。実話に基づく話だという。カール・モールドデン (Karl Malden) という鼻の先が二つに割れ眼のぎよろりとした初老の俳優が、娘と孫を殺した犯人を探して追い詰めていく話だった。何度も観ているうちにストーリーはあらかし理解した。だが、いくら聴いても意味の取れないセリフがある。クレジットには原作のタイトルと作者の名前が出てくる。それをメモして、私は八重洲ブックセンターの洋書売り場で、アメリカの出版元に発注してもらった。一カ月余りで分厚いペーパーバックが届いた。

読み進むと、会話部分がそのまま映画のセリフになつてい
るのではないか。これはありがたかった。聴き取れなかったセ
リフが次から次へと言葉として飛び込んでくる。外国語を学
ぶ醍醐味だ。しかし、それにしても恐ろしいストーリーだつ
た。医師である犯人が、妻と子供二人を殺害し、自分をも傷
つけて、強盗の被害者を装う。始めのうちは婿の話を信じて
いた父親が、小さな矛盾に気づき、丹念に婿の供述を覆して
いく。モールデンの大きな目玉と割れた鼻は、父親の執念を
これでもかこれでもかと思せつけてくれた。日本で公開され
なかったのが残念な映画だ。

話はそれるが、当時NHKで、外国のテレビドラマを流す
時間があった。「欲望」という名の電車」もその一つだった。
これを録画して観たおかげで、その後間もなくマーロン・ブ
ランドとヴィヴィアン・リーの演ずる同名の映画のVHSを
買うことになった。ニュー・オーリンズを舞台にした狂気の
ドラマは、この二人の気違いじみた競演で、凄まじい迫力を
醸し出している。原作はテネシー・ウィリアムズ、監督はエ
リア・カザン。一九五一年の映画だ。この戯曲の原書はわり
と簡単に手にはいったので、これも熟読した。NHKのドラ
マも、また映画の方も、セリフはほとんど戯曲のままなので、
理解するのにそれほど苦労はしなかった。ただし、ヴィヴィ
アン・リーは、とてもイギリス人とは思えない強いアメリカ
南部訛りの英語で話す。もちろん、マーロン・ブランドも訛

っている。

ところで、この映画には、若き日のカール・モールデンが
出ている。ヴィヴィアン・リー扮するブランチに惚れる純情
な男で、ただ者ではない演技力を見せている。なお、ブラン
チ (Blanche) とはフランス語の「白い」という形容詞の女
性形である。アメリカ南部はもともとフランス領であったの
で、フランス語の地名や読みかたが数多く残っていることも
あろうが、本当は純情可憐ではないのにそう演ずる主人公に
対する当てこすりもあつて、テネシー・ウィリアムズはそん
な名前を与えたと思われる。そもそも、戯曲の舞台となった
ニュー・オーリンズのオーリンズはジャンヌ・ダルクで有名
なフランスの地名オルレアン (Orleans) の英語読みである。

ヴィヴィアン・リーは、一九三九年の「嵐が丘」でヒース
クリフを演じたイギリス人シェークスピア俳優ローレン
ス・オリヴィエの恋人で、撮影中の彼を追ってロンドンから
アメリカに來たのをヴィクター・フレミング監督に見初めら
れ、「風と共に去りぬ」(同じく一九三九年)の主演女優に抜
擢されたという逸話を持つ。あの可憐だったスカレットが、
「欲望」では、いかにもあざやかにくずれた女ブランチに変
貌している。加齢による容貌の変化はもちろんあるが、そ
れ以上に、才能ある俳優の演技力の凄さを物語るものである。
容姿端麗だけでは、決して優れた役者にはなれないのだ。

映画を観て読み合わせた英語のシナリオはまだまだ数多

くあるが、切りがないので、またの機会に譲る。最近では、アメリカ映画に関する限り、大きな書店に行けば、対訳シナリオがずらりと並んでいるし、英語字幕スーパー付きのDVDも安く出回っている（「第三の男」は二九〇円）ので、こと英語の勉強に関する限り、昔の私のように苦勞することはない。そのわりに、英語の上手な若い人の数が少ないようにも思えるが・・・。



フランス映画のひねり

四十年余り昔にフランスに留学していたこともあって、フランス映画は随分観た。フランス人にとって、映画は演劇や

音楽や文学と同列の芸術である。私がフランスにいたころは、映画館に行くことはちよつとした行事だった。今はどうか知らないが・・・。

アメリカ映画と違って、フランス映画はべらぼうな金をかけない。大仕掛けで派手な装置を使つてのドタンバタンはまらずやらない。まさかと思うようなどんでん返しや人情の機微を描いて心を捉える。文化とは、頭を使うことなのだ。

レーザーディスク版の「太陽がいつぱい」を買つたのは一九九一年のことだった。ルネ・クレマン監督の、アラン・ドロンがこれで売り出したという話題作だ。悪事は順調に運び、たくらみが成就するかと思われる最後の最後で、どんでん返しが起こる。アラン・ドロンの冷たい美貌に痺れた人も多いだろう。

私は一九七一年の夏の三カ月を南仏モンペリエで過ごした。そこからイタリアに車で旅行したこともあって、この映画の舞台となった地中海の風景や、明るい日差しが苦しいほどにノスタルジアをかきたてる。フランス語に多少は自信のあった私だが、やはり聴き取れないセリフがいくつも出てくる。それに、気の利いた表現も自分のものにした。そこで、やはりシナリオがほしくなる。

飯田橋の欧明社はフランス語書籍専門店で、書棚の一角にシナリオのコーナーがある。映画だけでなく、芝居の台本まで置いてある。うまい具合に在庫があったので、横に並んで

いた「昼顔」のシナリオと「テレーズ・ラカン」の台本も一緒に買った。両方とも既に原作を読んで気に入っていたからだ。

「太陽がいつぱい」も十回以上音読し、また筆写した。今も、いくつかの場面とテーマ音楽がよみがえる。アラン・ドロンもマリー・ラフォレも若くて美しかった。殺され役のモリス・ロネは「死刑台のエレベーター」の主役だ。のちにドイツを捨ててフランスの女優となったロミー・シュナイダーがチョイ役で顔を出す、とてもかわいい（「サン・スーシの女」の主役で、ミシェル・ピッコリと共演）。

ミシェル・ピッコリは「昼顔」（一九六七年）にも登場する。この映画は、ケツセルの同名の小説を、スペイン生まれでフランクに追放され、メキシコに帰化したルイス・ブニエルが映画化したものだ。ブニエルは既成の考えかたや道徳を徹底的に否定する人で、その映画は矛盾に満ちており、ストーリーがあるようでない。「昼顔」は、彼の映画の中では、ストーリーのある方だ。現実と幻覚が切れ目なく連なっていて、観る者を惑わすが、テーマはやはり常識と既成道徳の破壊だろう。主役はカトリーヌ・ドヌーヴで、少し太り始めてはいるがまだ美しい。彼女は一九九二年の「インドシナ」で、再び痩せて美しくなる。

ブニエルは、「自由の幻想」で、テーブルの周りに便器を椅子代わりに並べて、食卓を便卓に変えてしまう。俳優が

真面目くさった顔で不条理なことをやっつてのけるので、観ていて吹き出しそうになるが、なぜそうも不条理なのかは観る者の判断に任される。「ブルジョアジーの密かな愉しみ」も「小間使いの日記」もそんな映画だ。スペインの独裁政権は、自国民であるピカソやブニエルを迫害し追放したが、フランスは彼らを受け入れ、その表現の自由を保証した。この懐の深さが、フランスをいわゆる「芸術の国」にしているのだろう。

私は南仏プロヴァンス出身の作家マルセル・パニョルが好きなので、著作を十冊くらいは読み、映画も何本か観た。彼は映画も製作する。「マルセルの夏」をご覧になったかたもおられるだろうが、これは作者の幼少時の思い出を描いたもので、読んでいて、また観ていて、とても楽しい。実は、彼の作品には恐ろしいほどのドラマ性を持ったものがあつてとても面白いのだが、残念ながら和訳されていない。だが、映画で日本に紹介されているものがあるので挙げておく。「愛と宿命の泉」というタイトルで、DVD化もされている。主役はイヴ・モンタンとダニエル・オトイユ。この二人が完璧な南仏方言のフランス語を話す。他の映画で、彼らがパリの発音でしゃべるのを観たり聴いたりしたので、てっきりパリ発音で南仏が舞台の映画をやるのかと思っていたから、これには驚いた。そう言えば、タイトルは忘れたが、古い白黒映画で、ジャン・ギャバンも南仏方言で演じていた。

みんな多才だ。日本の映画では、方言は相当いい加減に扱われていて、まともなのは少ない。市川崑監督の「細雪」はほぼ完璧な大阪弁で演じられていたから、日本にも例外はあることはある。

パニョルの小説には、随所にプロヴァンス語の単語が出てくる。フランス語の辞書に、これらは出ていない。それで私は、上京したついでに、新宿のフランス図書に頼んで、フランスから南仏語・仏語の辞書を取り寄せてもらった。これで、ほぼ完全にパニョルの小説を理解できるようになったが、それでもなお分からないと、フランスの友人に電話かメールで問い合わせる。彼女はリヨンに住んでいて、そこは南仏の北限だが、プロヴァンス語は分からないと言う。しかし、プロヴァンスの隣の地方語であるカタロニア語に同じ単語があるかもしれないから、バルセロナに住む友人に訊いてあげると言って、尋ねてくれたことがある。このやりかたで分かった単語もいくつかある。

多言語の世界へ

フランス映画はTVで時々放映されるし、今ではDVDも買ったり借りたりできる。日本で手にはいらぬものは、前述の友人に頼んで、フランスから送ってもらっている。また、上京したついでに欧明社に寄り、気に入ったDVDと、あれ

ばそのシナリオも買ってくる。ただし、録画方式がPALなので、日本のNTSCの再生装置では観られない。これは、四日市近郊では、鈴鹿のブラジル系の商店で手にはいる。そうそう、残念なことに、ブラジル人の経営する貸しDVD屋がすっかりなくなってしまった。ポルトガル語字幕スーパー付きの映画が簡単に観られたのに……。

私はこんなふうに映画を観てきた。映画そのものを楽しむよりも、言語を探求する気持ちの方が強いのもかもしれない。韓国映画のDVDも、ハングル字幕付きのものばかり探している始末だから。

でも、やっぱり、面白いから映画を観るのでしょね。

